

# 幽

# 霊

二松学舎大学  
文学部  
シンポジウム  
プログラム  
2022年2月12日(土)



# の

# 歴史文化学

— それほどここに宿るか

# 霊

目次

趣旨説明 幽霊の「場所」を問うこと——アフターコロナを見すえて 小山聡子 三

怪談語り 川奈まり子（怪談作家・怪談師） 五

「納骨の旅」 八

「地下倉庫」 一三

「モザイク球」 一四

「雑誌をペラペラ」 一五

「九段から富士見」 一六

第一セッション「幽霊が現れるところ」要旨

中国宋代の鬼（幽霊）の居場所 田中正樹 二〇

ここにいない幽霊——一九五〇年代日本文学における徴候 山口直孝 二一

憑くこと、写すこと——心霊写真と交霊会 前川 修 二二

第二セッション「アジアの中の英雄・英霊・神」要旨

英雄・怨霊・神——三国志の関羽の場合 伊藤晋太郎 二四

軍神と英雄——日本とインドネシアの戦没者の比較 林 英一 二五

台湾で鬼になった日本人 藤野陽平 二六

総合討論にむけて 幽霊に憑くことの学問的意味 松本健太郎 二七

これまでの幽霊の歴史文化学 二八

## 趣旨説明

### 幽霊の「場所」を問うこと——アフターコロナを見すえて

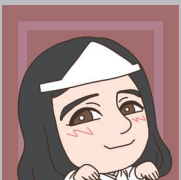
小山聡子

「幽霊の歴史文化学」第三弾となる今回のシンポジウムでは、幽霊の宿る場所をテーマとします。もともと我が国では、中国思想の影響により、靈魂は死ぬと体から抜け出て、時には悪さをなすさせることにより目と耳で確認し、対処しようと試みてきました。また、霊は、自在に浮遊するとされただけでなく、12世紀頃より骨に宿る性質も持たされ、墓に留まるとも考えられるようになりました。それ以後長きにわたり、草葉の陰からこの世の様をうかがい現れ出てくる霊が意識されるようになったのです。しかし近年は、散骨が一定の市民権を得ていることから分かるように、骨と霊の関係は薄れつつあります。つまり、幽霊は墓場から再び解き放たれ現れ出る場所を変化させているのです。墓場には、幽霊の実在を確信させるリアリティが失われつつあると言えるでしょう。霊の宿る場に関する歴史の変遷の検討は、精神史を探究していくことに他なりません。当然のことながら、精神史は、社会の有り様と密接に関わっています。このような検討を通して、現代人の心奥や社会の有り様を逆照射して眺めることも可能となるでしょう。

本シンポジウムでは、怪談作家・怪談師の川奈まり子さんによる現代怪談語り、研究者によるア

ジアや西洋における事例の発表を行います。その上で、総合討論では、幽霊のリアリティを感じる場所の変遷と社会変容、さらには幽霊の宿る場所に関する固有性から現代社会やその先について論究していきます。

今回は初めてのオンライン開催となります。オンライン会議システムは、関心のある方がどこからでも参加することを可能にしました。新型コロナウイルスの感染拡大が普及させたツールによって、世界は新たな結びつきを持つに至りました。しかし、それは幽霊の宿る場所の新たな誕生を意味するのかもしれませんが。アフターコロナの状況も見すえ、幽霊の現在、さらには行方を考えます。「幽霊の歴史文化学——それはどこに宿るか」、最後までよろしくおつきあいください。



こま・さとこ

二松学舎大学文学部国文学科（4月から歴史文化学科）教授。専攻は、日本中世宗教史。主な業績に、『浄土真宗とは何か―親鸞の教えとその系譜』（中公新書）、『往生際の日本史―人はいかに死を迎えてきたのか』（春秋社）、『もののけの日本史―死霊、幽霊、妖怪の1000年』（中公新書）などがある。

幽霊や憑依に関する中世の史料を日々紐解いているものの、元気が良すぎて幽霊から避けられているのか、目にしたことはないし、その気配すら感じたことがない。

# 怪談語り

「納骨の旅」

「地下倉庫」

「モザイク球」

「雑誌をペラペラ」

「九段から富士見」

川奈まり子

これらはすべて2018年の中頃にSNSで募った体験者さんから聴き取った体験談を出発点とし、体験地や歴史的経緯などの背景を調べて構成したお話です。

②の「地下倉庫」「モザイク球」「雑誌をペラペラ」の三作も、「九段から富士見」を書くきっかけとなった実在の体験者による談話を基にしています。

偶然、五作とも竹書房怪談文庫の拙著『実話奇譚 奈落』に収録しましたが、戦時中のできごとに囚んだ不思議な体験談は絶えず寄せられています。

今回、小山聡子先生から二松学舎大学の周辺の土地か或いは戦争に関わる怪談実話が望ましいと聞いて、戦争関連の作品を自著からリストアップ致しましたので、ご紹介させていただきます。

戦争関連怪談実話・拙著リスト（発行年度順・古い方から）

『実話怪談 穢死』

・穢死（山手大空襲）

『実話奇譚 呪情』

・人骨の叫び——戸山公園の怪 三（軍医学校跡地の人骨発掘現場）

・火災地獄の女像（関東大震災火災と東京大空襲）

・浜町の足音 一／ 二（東京大空襲）

・明治座の「君が代」（東京大空襲）

『現代怪談 地獄めぐり』※アンソロジー

・沖繩の母子（沖繩県国頭郡恩納村（沖繩戦））

『実話奇譚 奈落』

・納骨の旅（第二次大戦中に西太平洋の離島で戦死した兵士の遺族）

『少女奇譚』

・沖繩の修学旅行（沖繩県・集団自決）

『実話奇譚 怨色』

・兵士霊（※戦後の話です※ 自衛隊駐屯地で自殺した隊員の霊）

・夫婦（終戦後一年余り経って帰還した出征兵士と、その妻子）

『実話奇譚 蠱惑』

・被爆校舎の想い出（長崎の鎮西学院中学跡）

『一〇八怪談 鬼姫』

・第四二話 門司の怪②（福岡県・八幡空襲と門司空襲）

・第四七話 平和記念公園（広島原爆）

『二〇八怪談 飛縁魔』

・第一〇話 前世の夢（沖繩戦）

・第七一話 社屋童子（文京区にあった防空壕跡の遺骨）

【蛇足】プロフィールに書くこうと思ったけどやめたので、ここに書いておきます。数えてみたら自分の単著が32冊ありました。その内、怪談やホラー系は18冊。怪談実話の共著は13冊。2015年以降、月に20人前後をインタビュー。1人から1回平均4件を傾聴。つまり単純計算で5760件。実際にはもう少し多いはず。



# 納骨の旅

通信省告示第七百七十八號

《本月十五日ヨリ南洋諸島中サイパン、トラック、ボナベ、クサイ、ヤルト、ヤップ、パラオ及アンガウル島ニ於テ左記普通事務ヲ開始ス》

——大正四年十月五日 通信大臣 箕浦勝人

- 一、通常郵便物（外國郵便ヲ含ム）ノ引受
- 二、書留小包郵便（外國小包ヲ除ク）ノ引受
- 三、前記郵便物ノ交付
- 四、通常爲替及小爲替（外國爲替ヲ除ク）ノ振出
- 五、貯金ノ預入及振替貯金ノ拂込
- 六、爲替及貯金ノ拂戻並拂渡局無指定ノ小爲替ノ拂渡
- 七、郵便切手類及収入印紙ノ賣捌

（大蔵省印刷局「編」官報・1915年10月05日より）

宮城県出身の内藤重行さんの伯父は、アンガウル島

というパラオの離島で戦死した。

戦前から、通信省アンガウル局、つまりアンガウル島の郵便局で郵便局員として働いていたが、一九四四年の春から初夏にかけての頃に現地徴用された。そして同年九月から一〇月頃に起きた《アンガウル島の戦い》で亡くなったとして、終戦後二年もして、戦死広報（死亡告知書）と「英霊に就ての御知らせ」と題された遺骨に相当する物の案内文が宮城県の実家に届いた。

伯父は重行さんの父の兄で、祖父が亡くなっていたため、父が宮城県の家を継いだ。

この家で、重行さんは五人きょうだいの末っ子として生まれた。母が四二歳のときの子で、上の三人とは歳が離れすぎていて一つ屋根の下に暮らしていた期間が短く、重行さんにとって「姉」と言えば両親の四番目の子である和子さんということになった。

重行さんが中二、和子さんが高一の頃のこと。伯父

の戦友だったと名乗る男が家に訪ねてきた。戦後二〇

年も経っていたが、辛くも生き延びて帰国してからこの方、折を見ては伯父の生家を探していたのだと男は語った。

彼によれば、重行さんの伯父は、亡くなる前夜、海岸に係留された戦闘艦の甲板に座って洋上の月を眺めていた。それが伯父を見た最後になった。伯父が乗船した戦闘艦が米軍の艦砲射撃を受けて、大炎上しながら沈没するさまを目撃した――。

これで、伯父の物語には新しいページが加わった。伯父はアンガウル島の沖合で、乗っていた船が撃沈されて死んだのだ。

南洋に散った日本軍兵士の遺骨は無いのが通常で、伯父についても、戦死広報を貰った後に白木の骨箱が送られてきたが、中身は伯父の名を記した板切れ一枚だった。

祖母は涙ながらにこの話を重行さんと和子に聞かせて、伯父の墓の納骨室を開けて見せた。祖母の話したとおりに木の板が入っているだけであった。また、墓石には墓碑銘として、戦死によって二階級特進した階

級が刻まれていた。《上等兵》と。

《第一四師団宇都宮歩兵第五九連隊アンガウル島第一大隊第三中隊二等兵》

それが死の瞬間の伯父の身分だったのだと、祖母は重行さんたちに話した。若くして日本を飛び出して、青い海に囲まれた南の小島でバナナやパンの実を食べながら、のんびり郵便局員をしていたのに、と。

兵隊に取られたとき、伯父はもう四〇近かったはずだ。南の島で郵便局員をしていた彼が否応なしに兵隊にさせられて、ほんの数ヶ月後に海の藻屑と消えた。遣されたのは、戦友が語った死の前夜に月を見ていたという逸話と、こんな粗末な板切れだけ。

——このとき感じた切なさや怒りが、後々、伯父を悼む不思議な旅へ自分を導くことになったのではないかと、インタビュ어의折に重行さんは私に述べた。

一九七〇年、重行さんは東京都内の某大学に進学し、上京するとすぐに靖国神社を訪ねた。

伯父も祭神の一柱として靖国神社に合祀されていると父から聞かされていた。

本殿を正式参拝したけれど、このことを誰にも話さなかった。

当時、宮城県の実家の辺りには町内限定の有線放送電話しかなく、家族と連絡を取る手段は手紙だけだった。

重行さんは筆まめではなかったので、夏休みに帰省した折に報告しようと考えたのだ。

ところが母に奇妙な先手を打たれてしまった。

八月、帰ってきた重行さんの顔を見るなり、母が「伯父さんのお参りをしてぐれだんだね。靖国さ行ったんだべ」と話しかけてきたのだ。

「五月さ口寄せにががったら、『重行くんが近くに住むようになって、さっそくお参りに来でぐれだ。嬉しかったがら、どうもど伝えてぐれ』と伯父さんを降ろして話してぐれだんだ」

母は近所の口寄せ（いたこ）に通っていた。郷里の老人には珍しいことではなかった。

五月に口寄せを頼んだとき、伯父の霊魂が降りてきて、口寄せの女性の声を借りて、四月に重行さんが靖国神社を参拝した礼を述べたのだという。

父の名前を発見すると、すぐに重行さんに知らせさせた。

そこでさっそく重行さんも同じ本を手に入れて読んだ。

《——アンガウル島は、周囲わずか四キロの可憐な島である》

《その位置は北緯七度、東経一三四度……》

《椰子の葉繁る南国の、夢のごとき島で、濃紺の絵具をとかしこんだような明るい海の色が太平洋の雄大な波濤につづき、波動に照り映える陽光は七色に輝き……》

一読、眼前に青い太平洋が広がり、海路は伯父が没した場所に続いていた。

その後、重行さんと和子さんは、それぞれの伴侶を連れて、四人でパラオを訪ねた。

パラオはミクロネシア地域に散らばる大小の島からなる共和国だ。アンガウル島はそんな島々のうちでも

長い年月が過ぎた。五八歳になった重行さんは沖縄県を旅行した。祖母も両親もすでに亡く、世は平成、第二次大戦は遠い昔になり、口寄せを頼む時代でもない。

しかし、沖縄の糸満市にある平和祈念公園を訪れたとき、何の気なしに噴水広場に立ち寄って、噴水の円い水盤を覗き込んだ途端、水盤の底に記された「パラオ」の文字が目飛び込んできた。

驚いて水盤を観察すると、沖縄を中心にして東南アジアの島々が底に描いてあるのだった。たまたま立った位置の真ん前にパラオ共和国が描き込まれており、重行さんに最も近い所にある小島は——アンガウル。

このとき、重行さんは伯父にはつきりと呼ばれているような気がした。

姉の和子さんの夫が、船坂弘が著した『滅尽争のなかの戦士たち 玉碎島パラオ・アンガウル』という本を読んだのもこの頃だ。和子さんも夫と一緒に読んで、巻末にアンガウル島第一大隊の名簿があり、そこに伯

南端の外れの方にある。

重行さんたち一行は、最初の計画ではパラオ国際空港（現・ロマン・トゥメトゥール国際空港）のあるバベルダオブ島まで空路で移動し、そこからペリリュウ島を経由して船でアンガウル島に到着する予定だった。

バベルダオブ島から小型機でペリリュウ島に行くまでは問題なかった。

ところが、到着直後に折からの悪天候により高波が発生し、島嶼間に強い海流が渦巻いていて、ペリリュウ島から出航することは不可とされてしまったのだ。

そこで仕方なく、ペリリュウ島の最南端にある《西太平洋戦没者の碑》を四人で訪ねて、日本から持参した宮城県産の日本酒とお菓子を供え、般若心経を声と心を一にして碑文の前で読経した。そのとき読んだ般若心経は、伯父さんに捧げてほしいと言って県内で暮らす八つ上の姉が写経してくれたものだった。

《西太平洋戦没者の碑》の慰霊碑の背後は海原で、沖合に島影があった。

あれが、アンガウル島だ——この場に来られなかった伯父の血縁者全員を代表して、重行さんと和子さん

ていた。

は鳥影を見つめながら、伯父の冥福を祈った。

帰国前日の深夜、重行さんと妻が泊まっていたホテルの部屋に電話のベルが鳴り響いた。

妻が出ると無言で通話が切られた。

間違い電話かと思えばベッドに戻ってくる、と、再び電話がかかってきた。受話器を取って名前を訊ねたが、また切られてしまった。

なんとなく、伯父からのメッセージのような気がした。

翌日、空港に行くタクシーを一緒に待っているときに、和子さんに昨夜の電話のことを告げると、和子さんたち夫婦の部屋にも同じように二回、無言電話があったという。

和子さんたち夫婦はそれで終わりにせず、夫がホテルのフロントに電話について確認しに行った。その結果、電話の発信者はわからなかったが、ホテル内部の間違い電話やモーニングコールの設定ミスではないことが確かめられた。

和子さんも、伯父がメッセージを送ったのだと考え

## 地下倉庫

島崎康子さんが今から二〇年ほど前まで勤めていた会社には、怪談話が幾つもあった。

靖国神社がすぐ近くにあったから、旧日本兵のせいにしたがる社員もいたが、島崎さんは絶対に違うと確信している。

と言うのも、会社の地下倉庫にひとりで行ったときに、そこで女のハイヒールの足音を聞いたので。

平日の昼間、手が空いたときに、五〇〇枚入りのコピー用紙のブロックを幾つか持ってきておこうと思いつき、倉庫がある地下二階にエレベーターで降りていった。

こんなのは日常業務とも呼べないような雑用で、しょっちゅうやっていることだった。

当然、地下倉庫にも何度も入ったことがある。

しかし、この日に限って、エレベーターの籠から出た途端、天井の隅から小さく何かが爆ぜるような、あるいは平らなものを叩き合わせるような音がした。

「私たちに感謝の気持ちを伝えたかったんだよ」

「でも骨は拾えなかった。遺品一つでもいいから、故郷に帰らせてあげたかったな……」

「だけど、重行さんは小石を拾ったじゃない？ あれはアンガウルの方から流れ着いた石だと思う。きっとそうだよ！」

重行さんたちは《西太平洋戦没者の碑》を訪ねた後に、慰霊碑近くの海岸を散策した。その際、重行さんは、一つの白い小石と目が合ったような気がして、咄嗟に拾っていた。

今、その小石は彼の伯父の墓で眠っている。

びっくりしたが、

——この社屋もけっこう古い建物だそうだから、気温や気圧の変化でどこかが軋んで音が鳴ったのだろう。

そんなふうに合理的に考えて、気にせず作業を始めた。台車を取ってきて、紙に包まれたコピー用紙のブロックを五、六個、載せる。この間は、何にもおかしいことは起きなかった。

だが、台車を押しながらエレベーターの方へ戻りかけたとき、

カッ！ カッカッカッカッカッカッカッカ

……。

前方の空中を、ハイヒール特有の硬い足音が駆けあがっていった。

目に見えない階段を、透明な女性が急いで上っていくようだったという。

以前の勤め先で、島崎康子さんはいくつか奇妙な噂や体験談を耳にした。いわゆる怪談の類で、最初はまったく信じず、取り合わなかったが、自分以外は誰もいない地下倉庫で怪しい足音を聞いてしまってから、他の人の怖い体験談を疑うのはやめ、むしろ積極的に怪談に加わるようになった。

あるとき、定年間近な常務役員さんとその手の話をする機会があった。

この人は、島崎さんが尊敬している立派な人物で、とても理知的な、ちょっと悪く言えばスクエアな性格だったから、怪談めいたことは嫌いだろうと思っていた。

ところが意外にそんなことはなくて、向こうから「このまえ、地下で何かあったそうだね？」と水を向けてきて、島崎さんの話に相槌を打ったと思ったら、

「私も、あのことがあってから、地下二階には行かないことにしているんだよ」

——質問しないわけにはいかないようなことを言うのだ。

「あのことって何ですか？」

「昔、あるとき階段を降りていたら、地下二階の踊り場に、一抱えもある大きなボール状のモザイクが浮いていた！ それは宙を漂いながらゆっくり下に降りていったんだが、階段の段々や手すりが透けて見えていたよ！」

「モザイクって、タイルのですか？」

「えっ？ ああ、違う違う！ 一種のビデオの、その、なんだ。ハハハハハ！」

## モザイク球

二〇年前まで勤めていた会社には、旧日本兵の幽霊を思わせる怪談が多かったと島崎康子さんは語る。社屋のすぐ近くに靖国神社があるせいで、怪しいことがあると第二次大戦がらみの話にしたがる者が後を絶たないのだ——というのが彼女の考えだが、本当に兵隊の霊が現れたんじゃないかと思えるエピソードの中にはあったという。

夏のお盆の頃だというのに、休みも取らず、独りで残業していたある社員の話。

夜の九時頃、突然、進軍ラッパのような音が遠くから聞こえてきた。

靖国神社の方角から聞こえてきたようだと思い、席を立てて窓の方へ行こうとした途端、カーテンが風に翻ったかのように大きく揺れた。

しかし窓は完全に閉じていた。

ありえないことが起きたので立ちすくんでいたら、次に、近くに置いてあった雑誌のページが、ペラペラと音を立てて捲られた。

ペラペラペラッ、ペラペラペラッと、目の前で何度も

何度も雑誌のページが捲られて、まるで誰かが立ち読みしているような景色だが、そこには誰もいない。

「すぐに仕事をぶんなげて帰ったそうです。死ぬ思っただったと話していました」

「それは、そんなことがあったら怖いでしょうから。靖国神社が関係あるのかしら。それとも霊道？ この辺の土地の来歴を調べてみますね」

「はあ。でも、コンピュータのマシン・ルームがある会社だったので、電気が悪戯したのかもしれない。マシン・ルームなんて電気の塊みたいなものだし、普通のパソコンで作業していても、しばらくすると体が静電気を帯びてきますよ」

「では、島崎さんは、カーテンや雑誌のページが捲れたのは静電気のせいだとお考えなのですか？」

「いいえ。帯電している人には幽霊が近寄りやすいんじゃないでしょうか」



# 九段から富士見

東京都千代田区九段から富士見の辺りで有名な所と言ったら、靖国神社の名前が真っ先に挙げられるだろう。その他には、この辺りには、狭い地域のなかに一〇を超える教育施設がひしめいていることも、都民の間ではよく知られている。

九段の地名の由来は、千代田区観光協会では《江戸城吹上庭園の役人の官舎が坂の途中に九棟並んでいたからとも、江戸時代、急坂で九つの石段上の坂であったからともいわれています》と説明している。

江戸時代に描かれた葛飾北斎の「くだんう志がふち」と歌川廣重の「飯田町・九段坂之図」を見ると、どちらの絵を見ても、急勾配の道沿いに石段が造られ、それぞれの段上の平らな土地に長屋が建っていることがわかる。この九つの石段は建物の土台となる土留めの石組みとして、江戸の宝永年間（一七〇四～一七〇九年）に造られたようだ。

富士見の名の由来は文字通り、この辺りから、かつうだ。実は、この件の発端となった体験者さんがいた会社のビルは、ある大学のキャンパスに隣接しているのだが、こちらの大学にまつわる奇怪な伝説には以下のようなものがある。

「兵隊が行進する足音のようなものが聞こえる。音のする方を見ても誰もいない」

「学生運動が盛んだった一九七〇年に、ここの地下室に連れ込まれて集団リンチされた挙句に殺害された大学生の泣き声が聞こえる」

「夜になると、学生会館の大ホールに顔半分が無惨に潰れた女性の幽霊が現れて、着物の袖で竹竿を磨く」  
「学生会館の和室に、外人風の顔をした座敷童がいる。また、この建物内の鏡には血塗れの女が映る」

お化け屋敷さながらだが、七〇年にリンチ事件があった学生会館は十数年前に取り壊されて、現在は新しい建物に変わっているので、もうオバケの類は出ないかも。

なぜか学生会館に逸話が集中していた理由は、実際

ては富士山が見えたからだという。今では高層ビル群にさえぎられてまったく見ることが出来ない。

さて、なぜ、私がこの辺の土地の来歴を調べはじめたかと言うと、靖国神社の北側、道路を挟んで面した辺りにかつてあった某企業の社屋で怪奇現象が多く見られたと語る体験者さん取材したことに因る。

本当はそのビルを調べたいところだが、企業活動に支障が出ると下手をすれば訴訟を起こされて大変な目に遭いそうだから、直球を投げるのは控えている仕儀だ（情けない）。

では靖国神社はどうかというと、信ぴょう性が高い怪異目撃談はあまり聞かない。靈感が強い知人は、靖国神社の境内は浄化されていて幽霊はいないと話していた。参道で傷ついた兵隊の幽霊を見たという逸話もインターネットで採取できたけれど、体験者さんから直接、話を聞かないうちは何とも言えない。

ところが、お隣の学校には怪談の噂がとても多いように惨たらしい殺人事件がそこで起きたからだろう。いわゆる事故物件や災害の被災地にも怪奇現象の目撃談が多い。過去の悲劇を記憶する人々が多い場所は、ほとんど必ず心霊スポットになってしまう。

……いや、そういうことではなく、やはりこの界限には何か妖しい靈気が垂れこめているような気がする。

千代田区富士見といえば、『半七捕物帳』でお馴染みの作家・岡本綺堂の家も、富士見町一丁目の二合半坂の辺り（麴町・元園町）に建っていたという。私も本の帯を書いていただいております東雅夫さんの『江戸東京怪談文学散歩』によれば、綺堂は三歳のときに家の近所で神隠しにあった（もちろん後で無事に出てきた）。

また、岡本綺堂自身の著作「父の怪談」（『岡本綺堂読物選集・4』に収録）には、この家がそもそもお化けに取り憑かれていたような話が書かれている。

二合半坂の家は小さい旗本の古屋敷で、夕方、綺堂の父が読書をしていると障子の外で人の気配がしたが、障子を開けると誰もいない。また、夜中に綺堂の

母が縁側で誰だかわからない者と擦れ違い、そのとき女の髪に触れてゾットした——などということがある。その後、火事で家が焼け、岡本家は転居を余儀なくされる。しかしすぐ近くに引っ越したため、前の家に来ていた酒屋の御用聞きが再びやってきて曰く、「妙なことを伺うようですが、以前のお屋敷には別に変わったことはありませんでしたか」。

聞けば、なんと旧宅の旗本屋敷は昔から有名な化物屋敷で、開かずの間があったところ、賃貸に出す前に、部屋の封印を解いてしまったということだった。

——このときバンドラの匣から飛び出した魑魅魍魎が、九段や富士見の辺りには、もしや未だに跋扈しているのだろうか。

#### ●参考資料

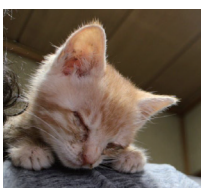
- ・「南洋占領諸島概記」逋信省通信局（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・「大正4年逋信省告示第778号」大蔵省印刷局「編」官報
- 『英霊の絶叫 玉碎島アンガウル戦記』『滅尽争のなかの戦士たち』船坂弘
- 『戦史叢書 第一三巻』防衛庁防衛研修所戦史部編
- ・「アンガウル島へ行こう」篠原直人・空のカケラライブラリ
- 『あこのころのパラオをさがして日本統治下の南洋を生きた人々』寺尾紗穂
- 『地球の歩き方リゾートスタイルパラオ』地球の歩き方編集室
- 『戦没者合祀と靖国神社』赤澤史朗
- ・「九段坂」千代田区観光協会
- ・「東京都名所坂つくしの内飯田町九段坂之図」歌川廣重・文化遺産オンライン
- ・「くだんうしがふち」葛飾北斎・文化遺産オンライン
- 『江戸東京怪談文学散歩』東雅夫
- 『岡本綺堂読物選集・4』岡本綺堂



かわな・まりこ 一九六七年生まれ。東京都出身。怪異の体験者と土地を取材、これまでに五〇〇〇件以上の怪異体験談を蒐集し、『八王子怪談』『東京をんな語り』『でる場所』『二〇八怪談 飛縁魔』『実話奇譚 蠱惑』『少女奇譚』『少年奇譚』『迷家奇譚』など怪談実話の著書多数。近年は怪談の語り手としても活動中。日本推理作家協会会員。

## 中国宋代の鬼（幽霊）の居場所

田中正樹



幽霊（鬼）に特定の居場所はあるのか。澤田瑞穂『鬼趣談義』によれば、「亡者」にはもはや「死」はないので「幽霊人口」は莫大になっているはずであり、「宇宙に遍満しているに違いない」が、「転生」などの「輪廻」循環理論があるので冥界の人口密度は「一定の額を保っている」とされる。つまり、冥界には亡者を把握する官僚組織（「閻魔王庁」）が存在し、「亡者」が転生する許可を得るには、冥界システムでの一定期間の奉職と、代替（身代わり）となる生者を探す必要がある（「鬼求代」）。幽霊にも様々な事情があり、埋葬されない（祭られない）場合、墓が荒廃・破壊された場合、そもそも冥界に身を置かない場合、など多様性がある。今回は、宋代の幽霊を中心に、我々が幽霊と遭遇する場所とその理由に関して、従来の諸説に基づきその一端を紹介する。



## ここにいない幽霊

——一九五〇年代日本文学における徴候



山口直孝

幽霊は、時代の影響を常に受ける存在であり、アジア太平洋戦争敗戦後においても変化が著しい。戦死者数が膨大であったがゆえに個別の物語がすぐには生まれなかったこと、占領政策以降の価値観の転換によって人々の世俗的な欲望が肥大化したこと、科学の発達が怪異現象に新たな解釈の枠組を与えるようになったことなど、さまざまな要因が作用し、幽霊はありようの更新を迫られることになった。怪談はなしが前提とした地縁や血縁が希薄化する中で、役割や出現する場所に違いが生じてくる。実在を懐疑視する見方が一般に浸透することで、幽霊の扱われ方にアイロニーの要素が現われることも見逃せない。本報告では、一九五〇年代後半の小説を手がかりに、高度経済成長期の日本人の心性を考察する。題名が幽霊の無力さを伝える二つの『幽霊はここにいない』（安部公房、結城昌治、結城作は、のちに『幽霊はまだ眠れない』と改題）、正体不明の老紳士が名探偵を務める柴田錬三郎『幽霊紳士』などを手がかりに、幽霊の描かれ方から時代の無意識に迫りたい。

たなか・まさき 二松学舎大学文学部中国文学科教授。専門は中国思想、中国美学。主な業績に、編著『中国古典学の再構築』（汲古書院）、『レオン・ド・ロニー旧蔵漢籍の書入れについて』（『レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学—旧蔵漢籍の目録と研究—』、汲古書院）、『宋代山水表現に於ける視覚と聴覚』（『見える』を聞いて直す』、彩流社）などがある。漢文のテキストとして中国の幽霊譚を使用することがあり、（主観的には）楽しく授業をしている。

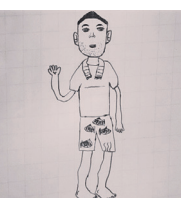
やまぐち・ただよし 二松学舎大学文学部国文学科教授。専攻は、日本文学。主な業績に、『私』を語る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出版期』（翰林書房）、『横溝正史研究』（共編著、戎光祥出版、既刊六冊）、『大西巨人——文学と革命』（編著、翰林書房）がある。小学校時代に中岡俊哉の心霊写真に魅せられて以来、超常現象に関心を持ち続けているが、不思議な体験にはまるで縁がない唯物論者。



## 憑くこと、写すこと

—心霊写真と交霊会

前川 修



19世紀半ばから欧米では、心霊主義思想を背景に交霊会が夜毎行われていたという。富裕な階層を中心に、彼らの邸宅に霊媒を招いて霊のさまざまなメッセージを受け取る試みのことである。写真は、その歴史の中で早くから交霊会に関わるようになっていた。実証主義の時代、確定できる事実を客観的に写しとめるための装置がカメラだったからである。

他方、同時期に世界各地で心霊写真スタジオが登場する。ここで写真を撮ってもらえば、被写体の、今はなき親族や友人の霊が写真には写るというのであった。もちろん、霊媒はここにいない。写真師がいるだけである。だが、実はこうした「セッション（撮影）」も、ある意味では交霊会だったのである。

心霊ブームが何度かの終焉を経た現在、交霊会は時折ブームにはなるものの、かつてのような広がりや勢いを失ったように思える。ただし、交霊会というセッションは、その最初期から私たちに写真映像というメディアを媒介にし、映像メディアの隙間を垣間見せる催しだったのではないか。報告の最後ではそうしたことを考えてみたい。

まえかわ・おさむ 近畿  
 大学文芸学部教授、専門  
 分野、感性学・写真論、  
 主要業績「心霊写真は  
 語る」（共著、青弓社、  
 二〇〇四年）、「イメージ  
 を逆撫でする…写真論講  
 義 理論編」（単著、東  
 京大学出版会、二〇一九  
 年）、「イメージのヴァナ  
 キュラー…写真論講義  
 実例編」（東京大学出版  
 会、二〇二〇年）。幽霊  
 がいるかいないかはわか  
 りません。しかし、いる  
 ／いないを揺さぶる心霊  
 写真は「ある」、そうい  
 う立場です。



## 英雄・怨霊・神

——三国志の関羽の場合

伊藤晋太郎



中国の三国時代を描いた古典小説『三国志演義』において活躍する英雄の一人に関羽がいる。この関羽は非業の死を遂げた後、真夜中に空中をわめきながら飛び回り、さらに仇である呂蒙や曹操に祟る。その所業は怨霊そのものといってよい。しかし、一方で関羽は後世に神格化されて「関帝」となり、現在でも中華圏で最も信仰を集める神といわれる。「関帝信仰」の文脈における関帝像は、『三国志演義』に見える怨霊のような関羽とは大きな懸隔がある。そこで本報告では、まず歴史上の関羽の生涯を確認してから、英雄である関羽が怨霊のように語り伝えられる段階を経て、どのように中華圏において上下を問わず信仰される神へと変遷していったのかを紹介した上で、関羽が神として崇拜されるに至った要因について検討し、非業の死を遂げて怨霊となった英雄が、後世に万民の信仰を集める神になった例の一つを示すこととした。

いとう・しんたろう 二松学舎大学文学部中国文学科教授。専攻は、中国文学。主な業績に、『関帝文獻』の研究（汲古書院）、『漢文講読テキスト 三国志』（共編、白帝社）、『秦漢 雄偉なる文明』（翻訳、創元社）などがある。以前、テレビ番組のロケで三国志の英雄の一人である曹操の墓を訪れた時、にわかに立っていられないほどの強風が吹き出し、ずるずると墓の入口に引き寄せられた。曹操が中から招いていたのかもしれない。



## 軍神と英雄

——日本とインドネシアの戦没者の比較

林 英一



日本の軍神とインドネシアの英雄について幽霊と絡めて報告する。まずインドネシアにおける幽霊の概念と報道、ホラー映画のなかでの扱われ方について検討し、幽霊がナシヨナリズムと相性が悪いと指摘する。これに対して、ナシヨナリズムを象徴するインドネシアの英雄と日本の軍神を比較し、考察する。インドネシアの英雄が国家によって「上から」創られ、現在も増え続け、ナシヨナル・ヒストリーを体現しているのに比べ、日本の軍神は国民の願望によって「下から」誕生し、敗戦後に忘却され、民衆史の文脈で捉えられ得ることを示す。さらに両者の相違は、日本人によってインドネシア残留日本兵が「軍神」として再発見されるといううねり現象を生んでいることを明らかにする。

はやし・えいいち 二松学舎大学文学部国文学科（4月から歴史文化学科）専任講師。専門は日本近現代社会史。主な業績に『残留日本兵——アジアに生きた一万人の戦後』（中央公論新社）、『戦犯の孫——日本人』はいかに裁かれてきたか（新潮社）、『ひとびとの精神史 第9巻 日本列島改造——1970年代』（共著、岩波書店）などがある。インドネシア滞在中に村人から幽霊が出たと教えてもらっても、お目にかかるとはなかった。

## 台湾で鬼になった日本人

藤野陽平



Illustrator 障子アケル

台湾では植民地期の日本人を祀る宗教施設がある。日本からは台湾が親日的で日本の植民地統治を好意的に捉えていることの証左として理解されているようだが、現地では別の捉えられ方をしている。「日本神」の多くは戦死した旧日本軍人であり、そうした異常死をした魂は、現地では「神」ではなく、まずは「鬼」になることが見落とされているのだ。台湾の「鬼」とは日本の鬼とは異なり、幽霊に近く、祀られなければ祟りをなす恐ろしい存在である。しかし、「鬼」は永遠に「鬼」なのではなく、祀られるうちに福をなす「神」へと変化することがある。こうして信仰対象になったのが、現在の「日本神」なのである。確かに台湾は日本に対して友好的かもしれないが、それで「日本神」が祀られているのではない。近年、こうした台湾の日本神について共同研究も行われるようになってきたが、未だ「神」になりきれない「鬼」の状態である日本人の幽霊についての報告は見られない。そこで本報告では台湾における「日本鬼」とはどういったものとして認識されているのかについて、フィールドワークでえた情報やメディア上の表象を紹介し、それが現代台湾社会にとってどのような意味があるのかについて検討する。

## 総合討論にむけて

## 幽霊に憑くことの学問的意味

松本健太郎

人は誰しもが死ぬ——死なない人間はいない——わけだが、その一方で、死後どういった事象に直面するのか誰にもわからない。しかも（ゲーム等による『追体験』ならともかく）生前に「自己の死」を『実体験』することは原理上不可能であり、また、その体験の体験不可能性ゆえに、死とそれに由来する幽霊のイメージーションは、古今東西、人びとにとっての関心の対象であり続けてきた、といえよう。じっさいにその状況は現代でも不変であり、「死のコンテツ化」の一環として社会に流通する幽霊たちの姿を、私たちはお化け屋敷やYouTube動画、心靈写真やJホラーなどの人為的な構築物のなかに発見することができる。

今日では記号化された「幽霊」が現実空間／仮想空間を跋扈し、コンテツ消費の対象へと化けつつある印象さえあるが、他方で、その姿が時代によっても文化によっても多様である点には留意が必要であろう。ないはずのものがみえる…人間のシンボル化能力の究極的産物ともいえるその姿とは、背後に介在する歴史的／文化的なコンテツを照射する格好の題材ともいえる。そして仮にそう考えてみると、たんに「幽霊」とはオカルト的で胡散臭いトピックというよりは、むしろ学問的にも積極的に議論すべき主題として立ち現れてくるのではないだろうか。



ふじの・ようへい 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究 院准教授。専攻は文化人類学。主な業績に『台湾における民衆キリスト教と癒しの実践』（風響社）、『ホッピー文化論』（共著、ハーベスト社）、『モノとメディアの人類学』（共編著、ナカニシヤ出版）がある。クリスチャンなので幽霊は信じていないが、どうにもトランス状態になりやすい体質のようで、シャーマニズムのフィールドワーク中に神がかかりようになってしまったことが数回ある。そうした時には困惑しつつ、少しワクワクもしている。

まつもと・けんたろう 二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科教授。専攻は映像記号論・デジタルメディア論・観光コミュニケーション論。主な業績に『デジタル記号論——「視覚」に從属する「触覚」がひきよせるリアリティ』（単著、新曜社）、『ロラン・バルトに就いて写真とは何か』（単著、ナカニシヤ出版）、『よくわかる観光コミュニケーション論』（共編著、ミネルヴァ書房）がある。幼い頃、靈感体質（？）だった祖母から、彼女が登山中に体験した怪談話をしばしば聞かされた記憶がある。そのせいか、幽霊とは当然いるものだと思っただけで、その後それと遭遇した経験も一度や二度ではない（…気がする。しかし、気のせいかもしれない）。

## これまでの幽霊の歴史文化学

### 二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「幽霊の歴史文化学」公開ワークショップ

2018年、二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト「死霊の表象をめぐる多角的探究」の活動の一環として、公開ワークショップを開きました。山田雄司三重大学教授の講演「生と死の間―霊魂の観点から」と、シンポジウム①「変容する幽霊―彷徨いの系譜」、シンポジウム②「死へのまなざし―幽霊が出没する空間を考える」が行われました。

2018年2月10日 13:00-17:50  
二松学舎大学九段キャンパス 1号館201教室

13:00 開会の辞  
13:10-14:00 基調講演「生と死の間―霊魂の観点から」  
山田雄司 (三重大学)

14:10-15:40 シンポジウム①「変容する幽霊―彷徨いの系譜」  
司会・山田雄司 (三重大学)

15:50-16:40 シンポジウム②「死へのまなざし―幽霊が出没する空間を考える」  
司会・内田忠賢 (奈良女子大学)

16:50-17:40 シンポジウム③「幽霊の表象をめぐる多角的探究」  
司会・松本健太郎 (二松学舎大学)

17:40 閉会の辞

事前お申込みは不要です。奮ってご参加ください。  
二松学舎大学東アジア学術総合研究所  
【お問い合わせ先】〒790-8558 鳥取県鳥取市九段2-1-14 TEL:013-230-2555 FAX:013-230-2556

#### 【概要】

日時 2018年2月10日(土) 13時～17時50分  
会場 二松学舎大学九段キャンパス1号館 201教室

#### 【プログラム】

開会の辞 小山聡子 (二松学舎大学)  
基調講演 山田雄司 (三重大学)  
シンポジウム①「変容する幽霊―彷徨いの系譜」  
司会・山田雄司 (三重大学)

小山聡子  
足立元 (二松学舎大学)  
山口直孝 (二松学舎大学)  
シンポジウム②「死へのまなざし―幽霊が出没する空間を考える」  
司会・内田忠賢 (奈良女子大学)  
遠藤英樹 (立命館大学)  
岡本健 (奈良県立大学)  
松本健太郎 (二松学舎大学)

閉会の辞 牧角悦子 (二松学舎大学)

### シンポジウム

#### 「幽霊の歴史文化学 ふたたび」

このシンポジウムは、2018年2月に行い好評を博したワークショップ「幽霊の歴史文化学」の続編として2019年に開催しました。幽霊が日本の歴史の中でどのようなものとして捉えられてきたかを、歴史学、メディア学、美術史学、文学、観光学などの多岐にわたる分野から検討していきます。

2019年6月16日(日) 13:00-17:30  
中洲記念講堂  
二松学舎大学九段キャンパス1号館地下階

12:00 開場  
13:00 開会の辞 小山聡子 (二松学舎大学)

13:00-14:15 基調講演「幽霊の歴史文化学」の歴史と現在  
14:10-15:40 シンポジウム①「変容する幽霊、ゾンビ」  
司会・山田雄司 (三重大学)

15:45-16:15 第II部「怪談と幽霊の最前線」  
講演 東雅夫 (早稲田大学)

16:10-17:15 講演 東雅夫・小山聡子・松本健太郎  
司会・山口直孝 (二松学舎大学)

17:30 閉会の辞 松本健太郎

入場無料  
二松学舎大学東アジア学術総合研究所・小山聡子研究室・松本健太郎研究室  
お問い合わせ先: koyama@shikoku.ac.jp | koyama@shikoku.ac.jp

#### 【概要】

日時 2019年6月16日(日) 13時～17時30分  
会場 二松学舎大学九段キャンパス1号館 中洲記念講堂

#### 【プログラム】

開会の辞 小山聡子 (二松学舎大学)  
趣旨説明 松本健太郎 (二松学舎大学)

第I部「跋扈する幽霊、ゾンビ」  
近藤瑞木 (首都大学東京)  
山本陽子 (明星大学)  
岡本健 (近畿大学)

討論 司会・足立元 (二松学舎大学)  
第II部「怪談と幽霊の最前線」  
講演 東雅夫  
鼎談 東雅夫・小山聡子・松本健太郎/司会・山口直孝  
閉会の辞 松本健太郎



論集

小山聡子／松本健太郎編

二松学舎大学学術叢書 『幽霊の歴史文化学』（思文閣出版）

【内容】 本来、目に見えないはずの幽霊——しかしこれまで日本人は、それを文学作品や絵画、映像によって描いてきた。「幽霊」という言葉の意味は時代によって変遷し、それはときに現代人の多くが想像するものと大きく異なる。人びとは幽霊をどう感知し、それを

目次

第一部 幽霊の存在論——それはどう生起するの  
生と死の間——靈魂の観点から——（山田雄司）  
幽霊ではなかった幽霊——古代・中世における実像——（小山聡子）  
死霊表象の胚胎——記紀・万葉集を中心に——（松井健人）  
第二部 幽霊の表現論——それはどう描かれるのか  
化物振舞——松平南海侯の化物道楽——（近藤瑞木）

表象するためにいかなる工夫をしてきたのか、幽霊になにを求めたのか。歴史学、メディア学、文学、美術史学、宗教学、社会学、民俗学等さまざまな研究分野から日本人の精神世界の一端に迫る。

『新釈四谷怪談』のお岩が映しだすもの——占領期の日本映画検閲と田中絹代のスターイメージをめぐって——（鈴木潤）

祟りきれない老婆と猫——中川信夫『亡霊怪猫屋敷』のモダンテイ——（山口直孝）  
幽霊とゾンビ、この相反するもの——肉体と靈魂の関係性と価値観の伝播について——（岡本健）

子見者・反逆者・哲学者——大塚睦の「幽霊」——（足立元）  
第三部 幽霊の空間論——それはどこに出没するのか  
上から出る幽霊——地上七・八尺の異界——（山本陽子）  
立ち現れる神霊——御嶽講の御座儀礼——（小林奈央子）  
大都市江戸の怪異譚——「耳袋」と「反古のうらがき」から——（内田忠賢）

デジタル時代の幽霊表象——監視カメラが自動的／機械的に捕捉した幽霊動画を題材に——（松本健太郎）

現代社会の幽霊（ゴースト）的読解——ホラー映画の表象とメディアの物質性（マテリアリティ）——（遠藤英樹）



四六判上製・344頁  
刊行年月 2019年2月  
ISBN978-4-7842-1964-3  
定価 2750円（税込）  
本体 2500円

それはどこに宿るか

# 幽霊の歴史文化学

二松学舎大学文学部シンポジウム

13時 開会  
13時 講演1 幽霊の存在論——それはどう生起するの——（山田雄司）  
13時 講演2 幽霊の表現論——それはどう描かれるのか——（松井健人）  
13時 講演3 幽霊の空間論——それはどこに出没するのか——（山本陽子）  
13時 講演4 化物振舞——松平南海侯の化物道楽——（近藤瑞木）  
13時 講演5 祟りきれない老婆と猫——中川信夫『亡霊怪猫屋敷』のモダンテイ——（山口直孝）  
13時 講演6 子見者・反逆者・哲学者——大塚睦の「幽霊」——（足立元）  
13時 講演7 立ち現れる神霊——御嶽講の御座儀礼——（小林奈央子）  
13時 講演8 大都市江戸の怪異譚——「耳袋」と「反古のうらがき」から——（内田忠賢）  
13時 講演9 デジタル時代の幽霊表象——監視カメラが自動的／機械的に捕捉した幽霊動画を題材に——（松本健太郎）  
13時 講演10 現代社会の幽霊（ゴースト）的読解——ホラー映画の表象とメディアの物質性（マテリアリティ）——（遠藤英樹）  
13時 閉会

2022年2月12日（土）  
13時～17時30分  
会場……オンライン  
要事前申込  
申込は2月11日21時までに  
右記のQRコードまたは  
左記URLから  
https://www.2c-u.ac.jp/Events/2022/02/12/ghosts/

参加無料  
幽霊、妖怪、鬼は有料

〒102-8336 東京都千代田区三軒町6-16 二松学舎大学文学部 交響館シンポジウム実行委員会  
メール: suricoin@kshbunkgakui@gmail.com

二松学舎大学文学部シンポジウム  
「幽霊の歴史文化学——それはどこに宿るか」プログラム

編集●二松学舎大学文学部 文学部シンポジウム実行委員会  
発行●二〇二二年二月十二日



# 靈

# 幽

二林学舍大学  
 文学部  
 文学  
 学舎大  
 2022年11月5日

# の

# 霊文外学

心 5 齋 乃 5 5 5 5 5 5 5